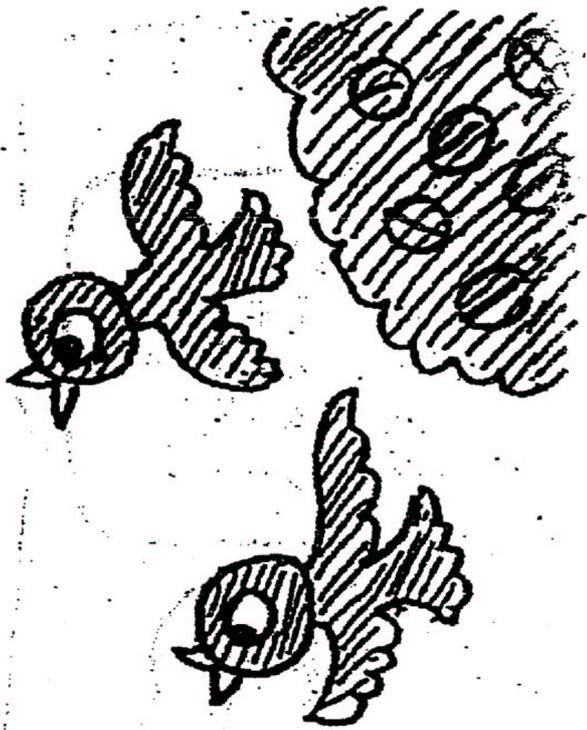


# 知

1995. 8. 6 No. 49

ソングレディ

まごつなく



## おかげさまで13人元気で帰ってきました

たくさんの方のご協力でわたしたち日本人は  
人は元気に帰国しました。こんなに全員体調がよ  
かったのははじめてです。

立派にでき上がった母子保健センター。たくさんの奥  
着さん・ナースたち、はじめての女性ドクター、中学生の  
2人がサッカーしたりこんだん会での交流、いきいきと  
希望にもえた子どもたち。すてきな旅でした。

(大木)



## 1995カラムディ村現地訪問の旅

### **<教育>**

まず、小・中学校の校長先生たちと話し合い。続いてカラムディ中学、幼児学級、ジャパニ小学校、第3小学校、第1小学校をまわり、最後にもう一度校長先生など教育関係者と話し合いました。

うたとゲームは岩切さんを中心に、中学校のクラス懇談会は高1のシャビーン君の通訳で、宮石君と中学生の安藤君、岩切君を中心に。日本から持って行った絵を見せて、生徒たちに絵を書かせる授業は松田さんを中心に、宮石君も参加。小田部小学校、内野小学校、YMCA専門学校、ガールスカウトの少女たちの絵にみんな大よろこび。内野小学校国際交流クラブの手紙にはさっそく、中学4年のクラスが英語で返事を書いてくれてペンフレンドの始まりです。うたは「手をたたきましょう」が大好き、ゲームは「ハンカチ落とし」「ロンドン橋落ちた」竹とんぼ、紙ひこうきなど、みんな生き生きと楽しそうでした。その他、夜間学級の見学や、村出身の短大生、大学生が23人でグループを作っていて、教育班で懇談会もしました。

### **<医療班>**

今年の医療班は、母子保健センターの開院を柱として、日本からの医師2人、看護婦5人に加え、保健センターのバングラデシュ人医師1人と看護婦2人、さらにビレッジドクターを加えてチームで取り組みました。

1. 診療活動は今年で3回目。特に丸木さん（産婦人科医）は妊婦を中心に女性の診療。27日には二人の出産を無事行いました。診察を受けようという患者は毎日4～500人が詰めかけ、患者の選択や整理におおわらわ。

2. 乳幼児検診と母親教室：保健センターに来た乳幼児や、村の各地を回って検診を行い、子供たちの栄養や成長状況を日本と比較。また妊娠中の母親を集めての健康教室も17人の妊婦が参加し、興味を集めたようです。

3. 医療器材が日本からの長い旅を終えて、ようやく村に到着。長旅で傷んだり錆びたりした器材をビレッジドクターたちと一緒に磨き上げて保管。使用法の研修と電圧その他の調整ができ次第、稼働予定です。

4. 保健センターの運営について：ノルジャマン医師と二人のナース、ビレッジドクターたちと、センターの活動・運営について話し合い。診療とともに、保健・予防活動に力を入れていくことを確認。



カラムディ村での私のお気に入りには空でした。大地と空は半々にあり、どこにいても、ほぼ360度空を見ることができます。

停電の夜、満天の星を寮の屋上で大の字になって寝そべり、皆で眺めた時の幸福感は言葉にかえがたいものがありました。南北に天の川がはっきりと見え、北側に白鳥座、中に琴座、南に鷲座、ずっと眺めていると流れ星が何回も流れ、涼しい風に吹かれながら、とても贅沢な時間を過ごしました。

1日に数回停電をするカラムディ村ですが、星を眺めている時の停電は、ありがたいものでした。

静かな時が流れ、星を眺めながら、昼間の疲れから1人、2人と眠り込んでいきました。

宇治 松枝

~~~~~

アッサラーム アライクム！

私は、医療班の一員として、二ノ坂先生と森さんと3人でチームを組み、医療に携わりました。気温34度・湿度90%の暑いなか汗をぬぐい、ハエを追いながら、たくさんの患者を診ました。

毎日傷の消毒に来る患者の中で、左足先に傷がある男の子がいて、この子は私たちの「明日もくるんだよ」という教えを守り、一日もかかさず一人で歩いてやってきました。どのくらい遠い所からくるのか、どんな家に住み、生活するためにどんな家庭の手伝いをしているのかもわからないけど、病院に、足の包帯を泥だらけにしながら毎日彼は裸足で来ました。そして、うれしいことに、診療最後の日に傷が治癒し、包帯がとれました。「もう大丈夫よ。よくなったよ。」の声に彼は本当にうれしそうに、はにかみ帰って行きました。

医療の手が加えられないことで、ほんの小さな傷から感染を繰り返し、発熱し、きつい思いをし、笑顔が消え、炎症はついに骨までおよび厳しい状態になる子どもいるなかで、この子の笑顔をつくれたことが私の喜びでした。カラムディ村の人々の笑顔をもっともっと、みんなの手が生み出すことができれば、村人も、私達も幸せです。一人一人のたくさんの幸せを願わずにはいられませんでした。

高橋 かおり

(4)

生まれて初めて降りたダッカ空港。銃を持った兵隊、好奇の目で近寄って来る人々。何とも言い様のない雰囲気から始まった、バングラデシュでの生活。ガンジス川を渡る、涼風が心地よく頬をなでる。暴走バスに乗って一路カラムディ村へ。母子保健センターでの診療活動。蒸し風呂と蠅との戦い。言語のハンディ、自分の歳を忘れて泣いた。いったい今まで、自分は、何をしてきたんだろう。手を延ばせば、届きそうな星空に何時までも自問自答した。援助の在り方、文化、価値観の違い、色々な事を考えさせられた。どこまで行っても、日本と同じ青い空と白い雲は続いているのに。私の人生に於いて、大きな節目となったカラムディ村の日々、夜更けまで語りあった仲間達、今からまた私の一歩が始まる。予測のつかない、湿度95%のaboutなバングラ頭を切り替えて、日本での現実に、皆の幸福にアッサラームアライクン！

安藤 恵子

僕はバングラデシュに行ってみて、日本は大変恵まれた国だと思いました。土や木の枝で造られた小さな家、靴だって履いている人は殆どいなくて、はだしのまま、服も同じ物を毎日着ていました。日本で、そんな生活は考えられません。子供も学校に行けない人がいて、家畜の世話をしたりしていました。夜間学校を見学しましたが、字が読めない大人や、昼間働かなければならない子供達が、一生懸命勉強していました。電灯がある所は少なく、ランプだけの暗い所で、僕だったら黒板に書いてある字も見えないのに、皆は大きな声で読んでいました。母子保健センターで二ノ坂先生の手術（アテローム）も見せてもらいました。今回、僕はバングラデシュに行って大変だったけど、本当に良かったと思いました。またいつか行けたらいいなと思っています。

下山門中学2年 安藤 浩彰

(5)



## 女性の幸せを—————星に祈りました

母子保健センターを開院するというお話しに興味をもって、医療班の一員に加えていただきました。先入観を持たずに行こうと考えていましたので、暑さにも、人々の多さにも、貧しさにも驚くことはありませんでした。

200人余りの女性患者さんたちに接して、ニコリ笑顔は妊婦さんの1人～2人で、ほとんどの人が15～16才で結婚させられて、家事・育児・畑仕事で重労働の上、皆の残り物の貧しい食事の果て、身体も心も30代ですでにボロボロといった感じで、暗い表情が多く、胸が痛みました。体重も45kg以上の人はほとんどいず、29kgなどという主婦も2人いました。若い人達、特に子供たちがまず教育を受けて、外の世界を知り、向上心を持つことが、バングラデシュの人々が一日も早く幸せに近づく必要条件だと痛感しました。

20年後にはきっと、今よりずっと幸せになってほしいと、満天の星を見上げながらアラーの神にお願いをしてきました。女性たちに手渡した、たった一つの石鹸やタオルが、蛍の光ほどの夢をあげられたらと思っています。

(丸木 陽子・産婦人科医)

## 母子保健センターの始まりの日々～点描

ダッカから8時間のバスの旅、疲れ果てた私たちの目の前の、真っ暗な闇の中に浮かび上がった3階建ての母子保健センター——その時、みんなの中から思わず湧いてきた拍手—————5日目、3台のトラック（後から夜中に1台追加）で、日本から送られた医療器材が着いたときの喜び—————7日目の早朝、二つの新しい命が初めて、この母子保健センターで誕生したこと—————肺炎で、ものも食べられなかった赤ん坊が、抗生物質（こちらでは同じ薬でも効かないことが多いようだ？）とポカリスエットで少しずつ回復していったこと—————ビレッジドクターとの話し合いの中で、習慣や文化の違いをめぐって激しく意見を戦わせたこと—————そして、それらの毎日の活動を通して、ビレッジドクターの幾人かと本当に心が近づいたと、強く感じられたこと—————

そんなことなどが、日本に還る途中の私の胸の中に、次々に浮かんできています。

## ☆教育班☆

今回私は、教育班の一員として、カラムディ中学、ジャパニ小学校、第1小学校で絵画指導に従事した。指導といっても、ただ数クラスの子供達に絵を描いてもらい一緒に話をし、いろいろと質問をしながら、彼等に村の紹介と日本の子供達にメッセージを書いてもらうというものであった。

しかし、こちらの準備不足もあって、なかなかうまくいかなかったのが、心残りである。子供達の絵は全体的に素朴で非常に素直なものが多く、ある意味で感動を覚えた。だが、実際に日常の授業の中では、図画・美術の授業はなく、彼等は絵を描くという体験が非常に少ない。その為、線画は描けても色が塗れない子がいたり、教科書（国語や理科など）の絵をうつす子もかなりいた。だが、色彩感覚はどの子も素晴らしいものを持っている。

子供達に何かを表現することの喜びをもっと知って欲しいと思った。紙もなく、色を塗る道具もない。私達が持っていったクーピーペンシルやクレパスではどうても数が足りない。一人一人に手渡して、思う存分描かせてみたい……。と、つくづく思う。彼等の秘めた感性をもっと目覚めさせてほしいと思う。

村の教育の現状では、まだまだ難しい。しかし、私達と彼等のかかわりが、やがて彼等の感性の目覚めへとつながることを私は心から祈りたい。

松田 曉志

§ ∞ § ∞ § ∞ § ∞ § ∞ § ∞ § ∞ § ∞ § ∞ § ∞ § ∞ § ∞ § ∞ § ∞ § ∞ § ∞ § ∞ § ∞ § ∞ § ∞ § ∞ § ∞

### ～子供たちの瞳に思う～

世界中どこでも、子供達の瞳の輝きって同じなんですよね。日本語教師として、アメリカの小・中学生に日本語を教えて、そして今回パングラデシュの小・中学生に接する機会をもって、本当にそう思いました。

ただ、その希望に満ち満ちた瞳の輝きが、自分達の置かれている環境や状況によって失われていくのは、すごく残念なんです。

もっというろんなことを知りたくて、知りたくてたまらないのに、先生がいない、時間がない、場所がない、そんな理由で自分達のPassionとEnergyを十分に出しきれないでいる。そんな彼らが、もう少しでもいい自分達の思いをとげられるよう、頑張っていきたい。今は、そんな思いです。

(8)

宮石 建治

## これからも交流と成長を

13人の報告と感想はいかがでしたか？

今回のメンバーはそれぞれ個性がはっきりしていて  
すてきでした。でも村の人たち子どもたちのしあわせ  
をねがっている点では同じでした。問題の とらえ  
方がしっかりしているのにも感心させられました。

村の人たちの気持は感謝にあふれていました。  
お別れの会するとき その感謝にこたえて わたし  
は「かたちはお金です。でも出して下さった日本人  
1人ひとりの心なのです」と言いました。

経済大国の日本と、アジアでもっとも食しい  
バングラデシュ。でも政治、経済、教育、環境、  
と問題は共通しています。民族はちがっても  
同じ地球に住む人間として これからも心からの  
交流とおたがいの成長を 続けて行きましょう。

大木松子



## ありがとうございました

◎旅費カンパをたくさんの方からいただきました。

◎谷初彦さんの書画展の売り上げ全部 108,000円

### 帰国報告と運営委員会

とき 8月20日(日)  
午後1:30~

ところ 渡辺通教会

ビデオ上映もあります。  
たくさんの方の参加を  
お待ちしております。

渡辺通教会

バス  
センター

大丸

RKB

渡辺通2丁目

バス停

渡辺通4丁目5-1

TEL 751-6103

RKBうら門前

### Bangladesh と手をつなぐ会

〒814

福岡市早良区西新5-5-13

TEL&FAX 092(822)5795

代表 大木 松子

郵便振替 01720-2-10442

加入者名 Bangladesh と手をつなぐ会

### ☆9月の運営委員会

9月10日(日)

午後1:30~  
大木さん宅

### ☆9月作業日

9月6日(水)

7日(木)

いずれも

午後1:30~  
大木さん宅